

〔博士論文概要〕

## WTP型キャンプセラピーが発達障害児の自己形成に及ぼす影響

令和4年度

坂本 昭裕

筑波大学体育系

本博士論文は、WTP型キャンプセラピーが発達障害児の自己形成に及ぼす影響について実践的に明らかにした研究である。論文は、8章から構成されており論文概要は以下の通りである。

### 【第1章】序章

わが国では、発達障害児を如何に支援するかということが喫緊の課題となっている。発達障害児は学業面での不振や型におさまらない行動など失敗の経験を多くしがちであり、保護者や教師、あるいは仲間からの注意や叱責を受けやすい。このようなことから、発達障害児の自己は定型発達児に比較して異なると言われている。例えば、発達障害児の自己概念は定型発達児に比較して低く、発達障害児の自己概念を高めることは、豊かな自己形成を支援する上できわめて重要である。キャンプをセラピーとして導入し始めたのはアメリカであるが、今日、このようなセラピーは、ウィルダネスセラピープログラム（Wilderness Therapy Program, 以下 WTP と略す）と呼ばれ心理社会的な効果が報告されている。しかしながら、わが国では WTP 型キャンプセラピーを実践し、発達障害児の自己概念などの自己形成に及ぼす影響を検討した研究は行われていない。そこで本論文では、発達障害児を対象にした WTP 型キャンプセラピーを実践し発達障害児の自己形成に及ぼす影響について検討することを目的とし、以下の6つの検討課題（第2章～第7章）を設けた。

### 【第2章】WTPの理論的検討（検討課題1）

第2章では、まず、キャンプセラピーの理論的基盤となっているアメリカにおける WTP の発展の経緯と現状について文献から概説した。次に、WTP の治療モデルの概説及び治療プログラムにおけるキャンプカウンセリングについて検討した。さらに、WTP の特徴について他の一般的な治療方法との比較からその特徴を明らかにした。WTP の発展は、冒険教育と呼ばれる危険を伴う野外活動を活用するアウトワード・バウンド（Outward Bound）のプログラムが契機となった。また、WTP の治療モデルは、アウトワード・バウンドのプログラムがモデルとなっており、その治療プロセスを確認した。さらに、クライアントに関わる際のカウンセラーの治療的態度としてロ

ジャーズの態度3条件によるキャンプカウンセリングの重要性を明らかにし、わが国においてWTP型キャンプセラピーを実践する上での要点を整理した。

### 【第3章】WTPの効果に関する先行研究の概観（検討課題2）

第3章では、アメリカにおけるWTPの効果に関する研究とわが国のキャンプを活用した発達障害児支援に関する先行研究のレビューを行った。WTPの効果は、1) 自己概念などの個人の成長、2) 集団における社会性及び対人的な成長、さらに3) 不安、抑うつ、薬物・アルコール依存などのメンタルヘルスに関する効果であることが明らかになった。また、WTPにおける発達障害児に焦点を当てた研究はわずかであった。一方、国内では、発達障害児を対象にしたWTP型キャンプセラピーに関する研究は全く行われていなかった。発達障害児は、定型発達児に比較して自己概念が低いことが指摘されており、WTPのこれまでの知見を踏まえWTP型キャンプセラピーを実践することによって自己概念に肯定的な影響を及ぼすことが期待されることを指摘した。さらに、発達障害児は、人と情緒的な関係を結ぶことに障害があると考えられており被受容感が低く、社会的スキルの発達が未熟であり、このことが自己概念形成に影響している可能性があることを指摘した。

### 【第4章】WTP型キャンプセラピーが発達障害児の自己肯定意識（自己概念）に及ぼす影響と被受容感及び社会的スキルとの関連性の検討：定型発達児との比較検討（検討課題3）

第4章では、発達障害児と定型発達児が参加するWTP型キャンプセラピー（統合型）を実施し、発達障害児の自己肯定意識（自己概念；客体的自己）と被受容感及び社会的スキルに及ぼす影響と自己肯定意識と被受容感及び社会的スキルとの関連性について定型発達児との比較から検討した。WTP型キャンプセラピーは1泊2日の事前キャンプと12泊13日間のメインキャンプを5年間に亘って実施した。調査対象者は、発達障害児20名（男子16名、女子4名、平均年齢13.43±0.84歳）、定型発達児66名（男子43名、女子23名、平均年齢12.0±6.73歳）であった。これらの調査対象者にキャンプ前、キャンプ直後、キャンプ1ヶ月後に自己肯定意識尺度と被受容感尺度及び社会的スキル尺度に回答を求めた。その結果、発達障害群の自己肯定意識は、対自己領域の意欲因子を除き、キャンプ前に比較してキャンプ1ヶ月後に有意に高い得点を示し自信因子、自己受容因子、充実感因子で効果が認められた。また、對他者領域の自己表明因子、自己閉鎖性因子、被評価意識因子では、キャンプ前に比較してキャンプ1ヶ月後において有意に高い得点を示し効果が認められた。発達障害群の被受容感は、キャンプ前よりもキャンプ後とキャンプ1ヶ月後に有意に高い値を示した。さらに、社会的スキルでは、関係参加行動因子と関係向上行動因子においてキャンプ前よりもキャンプ後、キャンプ1ヶ月後に有意に高い値を示した。発達障害群の自己肯定意識、被受容感、社会的スキルの得点は有意に向上を示したが、殆ど定型発達群よりも低い値を示し自己を低く評価していた。最後に、発達障害群の自己肯定意識と被受容感及び社会的スキルの関連性について共分散構造分析を用いて検討したところ、発達障害群の自己肯定意識は、對他者領域の

場合は、被受容感から社会的スキルを媒介して高まるが、對自己領域の場合は、被受容感が高まることによって向上する関連性が明らかになった。

#### 【第5章】心理的課題を抱える生徒を対象とした WTP 型キャンプセラピーが発達障害児の自己概念に及ぼす影響：発達障害児のみの検討（検討課題4）

第5章では、心理的課題を抱える生徒が参加する17泊18日間のWTP型キャンプセラピー（非統合型）を6年間に亘って実施し、発達障害児のみの自己概念（客体的自己）に及ぼす影響について検討した。また、ASDとADHDを分類し自己概念の効果を比較検討した。参加した生徒の中から23名の発達障害児（男子21名、女子2名、平均年齢 $13.43 \pm 0.84$ ）を対象に、自己成長性検査をキャンプ前、キャンプ直後、キャンプ1ヶ月後に実施した。その結果、WTP型キャンプセラピーでは、キャンプ直後に努力主義因子や達成動機因子などの自己統制に関わる因子に効果が認められた。また、発達障害児はキャンプ中に他者のまなざし意識因子が高い値を示すことから過剰適応していることが示唆された。自信と自己受容因子では効果が認められなかった。また、ASD群とADHD群の自己概念の比較では、有意差は認められなかったが、効果量で比較するとASD群の方がWTP型キャンプセラピーの効果が高いことが窺われた。

#### 【第6章】WTP型キャンプセラピーが発達障害児の自我機能に及ぼす影響の検討（検討課題5）

第6章では、WTP型キャンプセラピーが発達障害児の自我機能レベル（主体的自己）に及ぼす影響について検討した。発達障害児23名を対象に風景構成法（Landscape Montage Technique, 以下LMTと略す）と呼ばれる描画法を実施し、LMTの構成型の分類基準から自我機能の発達段階を分析した。さらに、構成型の変化が認められ、描画内容の変化が大きかった2事例の描画について検討した。その結果、発達障害児のLMTの構成型は、IからIII型（自己中心的段階）が14例（61.0%）、IV型（自我の脱中心化が進む段階）が7例（30.0%）、V型（自我の対象把握が可能な段階）が2例（9.0%）であった。LMTの構成型からみた発達障害児の自我機能レベルは、同年代の定型発達児の自我機能レベルと比較すると低い機能レベルであった。しかし、WTP型キャンプセラピー後には、8例が上位型への変化が認められた。その内訳は、ASD群が6例、ADHD群では2例であった。さらに、事例の検討から構成型の機能レベルが低い事例であっても、統合度が進み、描画の内容の豊かさや拡がりに変化が認められ、WTP型キャンプセラピーによって自我機能に及ぼす効果が認められた。

#### 【第7章】WTP型キャンプセラピーが発達障害児の自己形成に及ぼす影響に関する事例研究（検討課題6）

第7章では、WTP型キャンプセラピーに参加し顕著に自己形成が認められた発達障害児3名の事例研究を行った。3名の事例研究からWTP型キャンプセラピーの自己形成の特徴として以下の5点が考察された。1）発達障害児の自己の変化を促す環境の重要性。2）自己の常同性傾向（こ

だわり)の保持が崩れること。3)「個」としての自己から「社会化」する自己へと変化が認められること。4)身体運動による自己概念の肯定的な変化が認められ、全般的な自己概念に影響すると推察されること。5)主体的自己が形成されることが考察された。

#### 【第8章】終章：本研究の結論と実践現場への示唆

第8章では、本研究の結論と実践場面への示唆について論じた。WTP型キャンプセラピーの発達障害児への支援とは、プログラムの中で発達障害児と間主観的あるいは、相互主体的なやり取りをし、このことによって生じる様々な体験に向き合わせることに言える。それは発達障害児が自己中心的な自己から、社会的スキルを学ぶなど、キャンプ集団への社会化が促進され、社会化した自己を形成してゆくことである。そしてこれは社会化した自己を得ることによって、自他の境界、すなわち「私」と「あなた」が形成されることに他ならならず、そのことが自己概念(客体的自己)や自我機能(主体的自己)に影響を及ぼすものと結論付けた。実践現場への示唆として、1)受容的に接することの難しさを自覚し自己を守ること。2)個人と集団の両方に目を配ること。3)自然の中で起こる問題をグループの主体的な解決によって見守ること。4)参加者と共体験することが自己概念を支えることを指摘した。